令和６年
２０２４年

４月

日	月	火	水	木	金	土
	1 赤口 ひつじ	2 先勝 さる	3 友引 神武天皇祭 一粒万倍日 とり	4 先負 清明 いぬ	5 仏滅 る	6 大安 一粒万倍日 ね
7 赤口 うし	8 先勝 とら	9 先負 一粒万倍日 う	10 仏滅 たつ	11 大安 み	12 赤口 三りんぼう うま	13 先勝 ひつじ
14 友引 さる	15 先負 とり	16 仏滅 土用 いぬ	17 大安 る	18 赤口 一粒万倍日 ね	19 先勝 穀雨 うし	20 友引 とら
21 先負 一粒万倍日 う	22 仏滅 たつ	23 大安 み	24 赤口 三りんぼう うま	25 先勝 ひつじ	26 友引 さる	27 先負 とり
28 仏滅 いぬ	29 大安 ● 昭和の日 昭和祭 る	30 赤口 一粒万倍日 ね				

二十四節気

【清明 せいめい】… 四日

旧暦三月辰の月の正節で、このころになると、春気玲瓏として草木の花が咲き初め、万物に晴朗の気があふれてくるという意味です。

【穀雨 こくう】… 十九日

旧暦三月辰の月の中気で、このころは春雨がけむるように降る日が多くなり、田畑をうるおしてその成長を助け、種まきの好期をもたらします。春の季節の最後の節気です。

六曜・選日

《六曜》
【先勝】…諸事急ぐことによし、午後よりわるし
【友引】…朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む
【先負】…諸事静かなることによし、午後大吉
【仏滅】…万事凶、患えば長びくおそれあり
【大安】…何事をするのにも吉の日、大吉日
【赤口】…諸事油断すべからず、正午のみ吉

《選日の吉凶》
【三りんぼう】…三隣亡日、普請始め、棟上大凶日
【一粒万倍日】…出資・投資・購入、新規事業開始
婚姻は吉、借りる、離別は凶

七十二候《４月》

穀雨
- 初候・玄鳥至（げんちょういたる）ツバメが南から飛来する
- 次候・鴻雁北（こうがん きたす）ガンが北へ渡去する
- 末候・虹始見（にじはじめてあらわる）雨の後に虹が出始める

清明
- 初候・葭始生（あし はじめてしょうず）葦が芽を吹き始める
- 次候・霜止出苗（しもやんでなえいづる）霜が収まり苗代の稲が育つ
- 末候・牡丹華（ぼたんはなさく）牡丹の花が咲き始める

※七十二候とは二十四節気の各節気をさらに３つの候に細分し、一年を七十二に分けたものをいいます。季節の移ろいを気象や動植物の成長・行動などに託して表現したものです。

安産祈願 ４月の戌（いぬ）の日

４日（木）／１６日（火）
２８日（日）

＊戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

《 ２９日 昭和の日 》

激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、国の将来に思いを致す日です。

祝祭日には国旗を掲げましょう

「鎮守の杜」
～日の大神の恵みを得て～

植物は、水と太陽のエネルギーを利用して光合成によって酸素と炭水化物を作り出します。

地上の生物はこの恩恵なしでは生きていけません。そしてたくさんの植物が育っている森は、雨水を蓄え、蓄えられた水は森の養分を十分に吸収し川から海へと流れ込み、海藻が茂り魚たちの生きる場が創られています。まさに森は、天と地を結び太陽と水によって命を育む源です。私たちの祖先は、そのことを体験の中から学び、自然を神と崇めてきました。

昔から神社の杜は「鎮守の杜」といわれ、神聖なものとして大切に保護してきました。境内は神々が宿り鎮まる杜であり、いろいろな意味で私たちに恵みを与えてくれる森なのです。自然の中に神々を感ずる心を絶やすことなく「森」を守り、家族そろって「杜」へ参拝してみましょう。

卯月

〔うづき〕令和６年４月

卯の花が随所で咲き乱れるので、卯月または卯の花月と言いました。

発行：北海道神社庁一区教化委員会

とこしへに国まもります天地の神の祭をおろそかにすな
～明治天皇御製～

今月のことば

とこしへに国まもります天地の
神の祭をおろそかにすな

―明治天皇御製―

明治天皇は、その御一生の間に、十万首近く教育上必要な道をお詠み遊ばされた。大体は日常の教えであるが、この御製のように神祭りの道についても、根本の道を示されている。神職も数十年の体験を通して、「天地の神の祭」を、おろそかにしてはならない。

天地の神々のお陰によって、日本の平和も、日本国民の幸福も、はからられていると、知っている。それ故、日本全国に奉斎されている神々は、天つ神と国つ神とに別れて、それぞれの地域の守り神とされている。一般には氏神という神は、氏族の守護神とされている。神はそれぞれの土地の守護神とされるので、別に産土の神ともいわれている。

ここにいう天地の神は、天つ神、国つ神であると共に、天つ地域、国つ地域を、それぞれ持ちわけて守ります神としても信仰されている。広くみれば全国の神々と考えてもよい。敬神崇祖の道、ここに国体（国柄）の真の姿がある。

（続神道百言　財団法人神道文化会編より抜粋）

季節のまつり

入学
決意も新たに「氏神さま参り」

入学や就職、新学年、会社の年度始めなど生活環境が変わる時も、人生の大きな節目といえます。新しい何かが動き始める躍動の月の始めに、氏神さまにお参りをし、今後のさらなる御加護をいただき、無事に過ごせるようにお願いしましょう。

十三参
四月十三日
大人への入り口に知恵や福を

数え年で十三歳になった男女が、福徳と知恵が授かるようにお参りするならわしで、「知恵もうで」とか「知恵もらい」とも言われています。参拝の帰り道に後ろをふり向くと、授かった知恵を落とすという言い伝えもあります。十三参りは、もともと女の子のお祝いとして二百年ほど前に始まりましたが、十三歳という年齢は、男女共に肉体的にも精神的にも大人への変換期にあたり、少し不安定な時期でもあるため、親子ともども心身の健康をお願いしましょう。

関西地方ではさかんに行なわれています。

卯月八日について

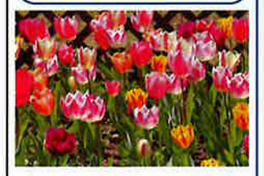
四月八日は花祭りで、お釈迦さまの誕生日だといって甘茶をかける風習は広く行きわたっている。しかし全国のこの日の習俗を見てみると、神祭りの日でもあることに気がつく。

関東の霊峰といわれる筑波山、赤城山、三峯山などの神社では、この日に例大祭が執り行われる。この日の筑波山神社の「御座替祭（おざかわりさい）」や、静岡浅間神社の四月三日の「昇り祭降り祭」のように、山の神が里に下られて田の神になるという信仰が全国的にある。また全国の神社の春祭りも、これとおおよそ趣きを同じくするものといってよいと考えられる。

卯月八日には福島県の東南部では、この日を神の日だといって田に入らない。また静岡県庵原郡には、この日に山の神を祭るところがある。また「千早振る卯月八日は吉日よ神さげ虫の成敗ぞする」と紙に書いて虫よけのまじないにするところがある。鹿児島県、徳島県の一部では、この日に山に登って遊楽する風習がある。このほか、この日にウツギ・ツツジ・シャクナゲなどの花束を竹竿につけて庭先に立てる風習が全国的にある。これをタカハナ・テントウバナと呼ぶところから見ると、やはり春の農耕期に先立っての「日の神迎え」の信仰が表されているものと考えられる。さらにこの日をソーリといっている地方（鹿児島県の一部）があるのは、これまた神迎えの日であることを示している。ソーリはサオリで、サオリのサは神のことを指す。このように本格的な春の農耕作業を開始するにあたっての神祭りの風習がこれほどはっきりしていることは、卯月八日が、実は日本列島全体の春祭りの時期であることを物語るものといってよい。

えんりょえしゃく 遠慮会釈

つつましく控え目にして、他人のことを思いやること。



チューリップ

参考文献
『くらしと祭り百話』小野迪夫（神社新報社）